フロニーモスたち（心を研ぐ人）

序章

私が本書のタイトルとして使った「フロニーモス」はアリストテレスが使った言葉で、実用知（プラクティカル・ウィズダム）の実行者という意味であるが、もう一つ「イノベーションを導く人」、つまり本書での哲人という、より重要な意味である。明確な目的、価値、意志を有すものをさし、この言葉はアクレイジア＝意志薄弱の反対をさす。

哲人は、哲学者でここではフロニーモスと同義語で、心を研いだ人である。

私は、この数年間、どうしてある社会はある時代に偉大な飛躍期(グレート・リープ・フォワード)、つまりパラダイム・シフトを導くイノベーターとなり、短期にそれができなくなり、ラガード（落後者）になり下がるかの理由を考察してきた。

難しく聞こえるが、ことは簡単で、それは現下の日本の萎縮にあった。

日本は、司馬遼太郎が著書「明治という国家」で示したように 150 年前にはおびただしい数のフロニーモスが輩出し、中国から東夷(東の遅れた地)と呼ばれた日本を近代国家へ偉大な変化を遂げさせている。それだけでない。わずか半世紀余り前の第二次世界大戦の直後の「戦後という国家」でも多数のイノベーターがでて、どん底にあった日本が不死鳥のように再び世界の前面で活躍する偉大な変化を遂げさせている。その日本が、なぜ半世紀足らずの間に、萎縮し世界のラガードに成り下がったのか、と。

そのような時に、ある人との会話がヒントになり、これらについての思索は既に 3000 年のギリシアに陸続として登場したソクラテスやプラトンやアリストテレスにより行われ、アリストテレスはフロニーモスという言葉を使いイノベーションを導く人について考察していたことを知った。なお、ある人との話は本書の末尾に書く。

私が実際にこの言葉を使ったのは 2008 年の春、ウィーン近郊のバーデンで行われた IAUP(世界学長会議;インターナショナル・アソシエイション・オブ・ユニバーシティ・プレジデント)の理事会（エグゼグティブ・コミティ）でのことであった。

IAUP は 1964 年に英国オクスフォードで発足した約半世紀の歴史をもつ世界の大学学長の協会で、主な目的は国際的な場での大学と教育のミッションを保つことである。現在は 129 カ国の 1200 名あまりがメンバーで、国連、ユネスコ、世界銀行や EU 等の国際的機関と提携し、またアフリカやラテンアメリカやアラブといった地域では個別に政府、あるいは NGO と連携して活動をしてきた。理事会は議長やセクレタリー（事務局長）をいれて 40 名弱で構成され、事業方針を決定する。

この時バーデンに集まったのは、現議長や次期議長、私を含めた理事 30 名あまりで、バーデンのホテルで缶詰状態で二日間の議論を行った。

1 日目の議論では、まだ金融問題は出ていなかったが、議題は G8 の首脳会議並みで現下の気候変動、さらに深刻といわれる水資源枯渇（深地下水の枯渇）、エネルギー・食糧製品の高騰、HIV 等々、また、コソボの紛争や中近東やアフリカでのテロの深刻化と砂漠化、貧困化問題なども取り上げられた。

もちろん、G8 の会合と違い人間の内面的問題も取り上げられた。昨今、日本では青少年犯罪の凶悪化、虐待、ドラッグ、自殺、そしていじめ、不登校、学力不足、また事故米、無責任な医療行政、社会保険行政といった事態が生じている。これらはすべて日本での内面的劣化とされているが、実は、これは日本

だけでなく程度の違いはあるが各国でも相当に深刻化している。
第 1 日目の総括が始まり、そのなかである理事が、これまで人類が営々と築いてきた「世界制度は崩壊しつつある。この中では大学人ができることには限界を感じる」と嘆いた。
翌日もあり、聞き逃せば済むことだったが、私は敢えて発言を求め「世界は崩壊しているのではない。それどころか、これまでのものより良い世界に向けての大胎動が始まっているのである。これは偉大な飛躍期と呼ぶべきパラダイム・シフトで、この時代の大学の役割は大きい。具体的に現下の課題は、いかにフロニーモスを育むかということである」と述べた。
夕方のレセプションが迫っているのに、という顔つきの事務局を無視し、私は次いで、「人類の歴史では偉大な挑戦が時として起きること。現下の私たちが見ているできごとは、一つ一つはまるで無関係に見えるが、実はそうでなく全てが因果関係にありこの挑戦の一部といえること。このシフトでのポイントは「思考の切り替え」であり、全ての人は例外なくこれに巻き込まれること。またこの挑戦時にはいち早く心の切り替えができたイノベーター（革新者）とそうでないラガード（落後者）が出る。これは個人レベルでの成功者と失敗者を作るだけでなく、企業や社会レベルでは勝者と敗者といえる差をもたらすことを話した。
私は、また、この例として、直近の偉大な飛躍期＝パラダイム・シフトは 19 世紀におきたとした。そしてこの挑戦の余波は世界の隅々まで及んだこと、この時のイノベーターとなった国はいわゆる欧米、それにアジアでは唯一日本が周回遅れながら続き、一方、ラガードとなった国はそれまで封建世界の超大国として君臨していた中国やインドであった。イノベーターたちはこの後の世界の前面に躍り出たし、一方、ラガードたちは超大国どころか半植民地、あるいは植民地に成り下がった。また、この偉大な挑戦は偉大な聖人により導かれるのではなく、一群のフロニーモスによりもたらされること。このフロニーモスを育むことはギリシアのソクラテス以来の懸案であったが、今回は大学人にその任があること。
私は続け、「IAUP は何もできないどころではなく、21 世紀のイノベーションを導く人作り（フロニーモス）教育の体制を作ることができる。これが必要なのは、中近東やアフリカだけではない、現在の先進諸国と呼ばれている欧米や日本を含んでのことだけに偉大な協働が可能になる」と述べた。
彼らの多くはフロニーモスという言葉は初めて聞いたのか、質問が続いた。フロニーモスのスペルは。誰がいいだしたのか。フロニーモスの特徴は何か。フロニーモス教育とはどのようなものか、と。
おかげで、2 日目に私は、この話の続きをすることになった。
以下に述べることは、この数年間、興味を持ち続け学んだ精神哲学[1]や認知科学を借用した。なお、この認知科学は科学としては由緒正しく、もとはギリシアにでたもので、人間がどう認知するかを問うている。現在では、分子生物[2]、脳科学、コンピュータサイエンス、情報理論、心理学、精神哲学といった総合科学となり、それこそ人間と人間もその一部の自然との関係を知る科学といえる[3]。

---

[1] The Undiscovered Mind, J. Horgan, Free Press, 1999

[2] Genes, Mind, and Culture, C.J.Lumsden and E.O.Wilson, Harvard Press,1981

[3] Human Natures, P. R. Ehrlic, Penguin Book, 2000: Steps to an Ecology of Mind, G. Bateson, University of Chicago Press, 2000: The Science of Mind, Ernest Holmes, Tarcher, 1998: The Logic of Life, F. Jacob, Random House, 1983: The Evolution of Progress, C. O. Paepke, Random House, 1993

ギリシアに始まったといったが、20 世紀の後半にこの科学はそれまで自然科学一辺倒だった欧米の研究者が取り上げ、成果は経営論や教育論や研究開発論、そして組織論、リーダーシップ論に広く使われだした。ただ、残念ながら日本では認知科学は、未だマイナーな存在で、脳科学やパターン認識といった矮小化されたものにとどまっている。